

平成26年度 スーパーグローバルハイスクール評価 活動報告

著者	石井 克佳, 松井 一夫, 岡 聖美, 建元 喜寿, 後藤 卷子, 仲本 佳子, 金城 幸廣, 石田 光枝, 藤原 亮治, 福島 寛美
著者別名	Ishii Katsuyoshi, Matsui Kazuo, Oka Kiyomi, Tatemoto Yoshikazu, Goto Makiko, Nakamoto Yoshiko, Kinjo Yukihiro, Ishida Mitsue, Fujiwara Ryoji, Fukushima Hiromi
雑誌名	研究紀要
巻	52
ページ	82-89
発行年	2015-09
その他のタイトル	An Annual Report on the Evaluation Committee of Super Global High School 2014
URL	http://hdl.handle.net/2241/00144535

平成 26 年度スーパーグローバルハイスクール評価活動報告

SGH 評価委員会 石井 克佳、松井 一夫、岡 聖美、建元 喜寿、後藤 卷子、
仲本 佳子、金城 幸廣、石田 光枝、藤原 亮治、福島 寛美

平成 26 年度より、文部科学省はスーパーグローバルハイスクール(SGH)事業を開始した。この事業は高等学校等におけるグローバル・リーダー育成に資する教育を通して、生徒の社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、もって、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図ることを目的としている。開始初年度である平成 26 年度は全国から 56 校が選定され、本校もそのひとつとなった。本稿は SGH 実施初年度に研究推進委員会が評価活動を行った概要である。

キーワード グローバル人材育成 スーパーグローバルハイスクール 評価活動

1. はじめに

平成 26 年度より、文部科学省はスーパーグローバルハイスクール事業を開始した。この事業は高等学校等におけるグローバル・リーダー育成に資する教育を通して、生徒の社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、もって、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図ることを目的としている。開始初年度である平成 26 年度は全国から 56 校が選定され、本校もそのひとつとなった。スーパーグローバルハイスクールの高等学校等は、目指すべきグローバル人物像を設定し、国際化を進める国内外の大学を中心に、企業、国際機関等と連携を図り、グローバルな社会課題、ビジネス課題をテーマに横断的・総合的な学習、探究的な学習を行う。学習活動において、課題研究のテーマに関する国内外のフィールドワークを実施し、高校生自身の目で見聞を広げ、挑戦することが求められる。指定されている学校の目指すべき人物像や具体的な課題の設定、学習内容は、地域や学校の特性を生かしたものとなっており、本校は「先進的な総合学科を活かした持続可能なアセアン社会を創るグローバル人材の育成」を研究開発課題とし、急速にグローバル

化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを高等学校段階から育成する。本報告は、SGH の活動に対する評価活動を通して課題を整理し、成果を明らかにし、5 年間の活動がより効果的になることに寄与するものである。

2. 評価活動と計画

(1) 今年度の評価活動

平成 26 年度の SGH の活動は、5 年計画の第 1 年次として準備・試行期間と位置づけ、新規開発単位の試行および既存の科目との位置づけの明確化および内容の精選を行う。これをうけて「研究推進委員会」が「SGH 評価委員会」として SGH の評価活動を実施することになった。その構成は研究部より 5 名、教務部より 1 名、教科より 5 名の教員からなる。準備・試行期間として位置づけられた今年度の重点項目の中から、グローバル入試実施状況、国際インターンシップの評価、生徒の意識変化についてアンケート調査等を実施しながら評価活動を行うこととした。また、今後さまざまな場面での変容を想定し、可能な限りデータを集

めておくこととした。

(2)SGH の本構想において実現する成果目標の各項目および設定(アウトカム)を確認した。

- ①自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数
- ②自主的に留学又は海外研修に行く生徒数
- ③将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合
- ④公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数
- ⑤卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1~B2レベルの生徒の割合
- ⑥卒業時におけるインドネシア語検定E級以上取得者数

(3)SGH 指定4年目以降に検証する成果目標を確認した。

- ①国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合
- ②海外大学へ進学する生徒の人数
- ③SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合
- ④大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数

(4)グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標(アウトプット)を確認した。

- ①課題研究に関する国外の研修参加者数
- ②課題研究に関する国内の研修参加者数
- ③課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数
- ④課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)
- ⑤グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数
- ⑥帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)

⑦先進校としての研究発表回数

⑧外国語によるホームページの整備状況

(5)事前調査について

- ①生徒の事前調査では、附属学校教育局プロジェクト研究での成果を生かし、統一された方法で全員を対象にアンケート調査を実施した。
- ②さらに、生徒の国際教育に対するイメージを調べるための、自由にキーワードを書き出す調査を実施した。
- ③保護者と後援会員(合計100名)に対しては、本校の国際教育に対する理解度と協力への意欲を調査した。

(6)事後調査の計画について

- ①今年度末に事前調査と同じ内容のアンケート調査を生徒全員に実施する。
- ②ホームステイを受け入れた保護者に対して、何らかの調査を実施する。

(7)今後の進め方について

- ①今後は、SGHの実施計画とともに、その活動の目的と効果を検討し、評価計画を立てる。実施と評価が表裏一体となるような計画が望ましい。
- ②生徒全員に対しては、アンケート調査。保護者会や後援会の会合の際は、アンケート調査。生徒の特定の活動(たとえば、国際フィールドワーク、S-CISの活動、国際シンポジウム)に関しては、個別の聞き取り調査を実施することが望ましい。
- ③評価計画や評価方法については、引き続き附属学校教育局プロジェクト研究においても検討し、評価の適正や客観性を維持したい。

3. 調査結果

(1)グローバル入試実施状況

SGHに伴い平成27年度入学生より入試制度を改定し、従来実施してきた推薦入試、一般入試に加え、新たにSG入試を導入した。40名

程度（単願枠 30 名、併願枠 10 名）の選考方法を次の 2 方法により実施した。

I 型は書類（調査書・志願理由書）、学力試験（英語（必須）、国語または数学（日本語による））および面接（日本語）により選考した。II 型は書類（調査書・志願理由書）、学力試験（英語）、面接（日本語、英語のいずれか）、小論文（英語または日本語による出題、解答は英語または日本語）により選考した。海外帰国生・外国人受験生は「II 型」を選ぶこともできるようにした。また、CEFR B1 レベルの英語に関する資格を有する者は証明書を提出の上、英語の試験を免除した。

SG 入試が始まり、従来の入試方法と大きく異なるため受験生の特性を比較することは困難だが、応募者が増加し、出身中学校も国内海外含めて範囲が広がった。平成 27 年度入試の応募倍率は、SG 入試 2.1 倍、推薦入試 2.6 倍、一般入試 2.5 倍、合計 2.5 倍となった。

(2) 国際インターンシップの評価

夏季休業中にインドネシアで実施した「国際フィールドワーク」参加生徒に対し、事前事後調査をアンケートにより実施した。鈴木ら（2000）が開発した「国際理解測定尺度」を基に質問紙を構成した。質問項目は計 48 項目、5 件法からなる。参加した生徒の構成は 2 年次生 2 名、3 年次生 5 名の計 7 名である。調査票作成と分析は、飯田順子、藤原健志（筑波大学附属学校教育局）の協力を得た。

アンケート調査の結果を表 7-1、7-2 に示す。事前事後を比較すると、「外国人への親和性」（3.68→3.93）、「他者理解」（4.05→4.38）においてわずかに上昇した。また「アサーション」（3.86→3.57）はわずかに下降した。すべての項目において、統計的な得点の有意な差は認められなかった。その理由としては、以下の点が挙げられる。①参加した 7 名の生徒のうち 5 名の 3 年次生は、前年 12 月に実施した海外への校外学習（オーストラリア 2

名、インドネシア 3 名）に参加している。オーストラリアへの校外学習では、「外国人親和性」「自国理解」「英語力」に有意差、「他者理解」「アサーション」に有意傾向がみられ、いずれも事後の得点が事前の得点より高かった。インドネシアでの校外学習では、「アサーション」で有意差、「多文化尊重」、「文化興味関心」で有意傾向がみられ、いずれも事後の得点が事前の得点より上昇した。②この影響を考慮すると、事前の平均点がすでに高い値を示しており、いわゆる尺度の「天井効果」のため、高い状態が持続していると考えられる。③参加した 2 名の 2 年次生は、この後 12 月にインドネシアでの校外学習に参加することになっており、夏季と冬季 2 回渡航することになる。

このように、海外でのフィールドワークへ参加した生徒について、事前事後の意識変化を調査したが、この渡航の前後での体験も含めて、生徒達は高いモチベーションを維持していることがうかがえた。

(3) その他の調査ならびに評価活動

今後さまざまな場面での変容を想定し、集計を別の機会に行うものも含め、可能な限りデータを集めておくこととした。以下に実施および計画した調査項目を挙げる。

① 自由連想法アンケート（1, 2, 3 年次生徒）

「アセアン」「グローバルな人」「外国語」などのキーワードを示し、生徒が思い浮かぶ単語や短い文を書き出す。これについては、複数年データを集めてから分析することとなった。

② 保護者の意識調査

6 月に PTA 総会に参加した保護者らを対象にアンケート調査を実施し 118 通の回答を得た。「本校の国際交流に対して、どんなことを期待しますか」という質問に対して、主な回答として以下のような結果を得た。

「将来役立つ国際感覚を身につけてほしい。留学生を受け入れて、交流を盛んにしてほしい。生徒全員が SGH の活動に関わってほしい。積極的に

関わる人材を育ててほしい。伝統や文化を大切に
した交流をしてほしい。英語などの語学力を高めて
ほしい。」

このような結果から、SGH に対する保護者から
の期待を知ることができた。

③ 2 年次校外学習の事前事後調査

平成 25 年度から実施しているオーストラリ
ア・インドネシア・台湾の 3 カ国を生徒が選んで
参加する校外学習について、(5)の調査を併用して
実施した。調査票作成と分析は、筑波大学附属学
校教育局プロジェクト研究「子どもの国際的資質
を育てる実践」において SGH の活動とは直接的に
は関わらないが、今後の比較のためのデータとし
て有効であると考えている。それぞれの調査結果
を④～⑥に示す。

④ オーストラリア

オーストラリアを選んだ生徒は、外国人への親
和性・海外への積極性ともに事前では一番低い群
であった。事後には、国際理解の 10 の要素はいず
れも得点が上昇し、概ね良い体験がもてたことが
推察される。「親和性」「自国理解」「英語力」が有
意に上がるという結果は、飯田他（2014）のシン
ガポールの結果と一致していた。シンガポールと
オーストラリアは共に英語圏であり、社会経済的
にも発展した国である。そうした国を訪問するこ
とによって、「外国人への親和性」が高まること、
「英語」を日常レベルで使うことにより「英語力」
が高まること、また英語で自国文化を紹介する機
会をもつことで「自国理解」が高まる効果がある
ことが示唆された。

⑤ インドネシア

インドネシアを選んだ生徒は海外経験の厳しさを
理解した上でインドネシアを選択した群であり、
旅行前から海外への親和性、文化興味関心等、
国際理解の各側面が高い傾向を有していた。その
なかでも、今回さらに多文化尊重や、異文化に対
する興味関心、アサーションが上昇していた。イ
ンドネシアでは熱帯気候のもと多くのイスラム教

徒が暮らし、独特の自然環境や伝統文化をもつ。
生徒は次第にホストファミリーと打ち解け、笑顔
とともにインドネシア語の語彙が日に日に増えて
いった。そのような今までに体験したことがない
文化に触れることで、生徒は多文化を尊重する姿
勢や多文化への興味関心が高まり、またホームス
テイや現地の高校生との交流のなかで自分の意見
を述べることの重要性を学んだことが推察され
る。今後の課題として、どのような活動や体験に
よって、これらの要素が高まったのか、生徒のイ
ンタビュー等の質的データと照らし合わせて分析
することが必要である。

⑥ 台湾

事前事後の比較では、問題解決の得点のみ得点
の上昇が有意傾向を示した。問題解決の項目は、
「開発途上国の子どもたちが教育の機会に恵まれ
るよう支援していきたい」「世界の自然を守るため
に活動している機関を支援したい」といった他者
との共同での問題解決力を測定する項目である。
今回、台湾の研修旅行では、「自然」「防災のあり
方」「漢字文化」という特定のテーマを選び、現地
の高校生と協同学習を行っている。こうした協同
作業が、グローバルな課題を意識し、共同で問題
解決することの重要性を意識する体験となったこ
とが考えられる。一方、他の要素では得点の上昇
が有意とならなかったことについて、台湾は非常
に親日国であり、現地の生徒や家族が日本語を話
す場合もあり、あまり異国を意識しないのではな
いかということが考察された。同じ様に海外研修
旅行に行っても、行く国やそこで得られる経験に
よって効果が違うことが示された。

(3) 調査結果のまとめ

グローバル入試実施状況、国際インターンシ
ップの評価、生徒の意識変化についてアンケート調
査等を実施しながら評価活動を行った。グローバ
ル入試実施状況は、応募者が増加し、出身中学校
も国内海外含めて範囲が広がった。国際インター
ンシップについては事前事後の意識変化を調査し

たところ、渡航前後の体験も含めて、生徒達は高いモチベーションを維持していることがうかがえた。生徒の意識変化についてアンケート調査については、オーストラリア・インドネシア・台湾の3カ国を生徒が選んで参加する校外学習を参考に検討したところ、渡航先・渡航目的・現地での活動によって喚起される項目に差が現れることが理解できた。

4. 運営指導委員会資料

【第1回SGH運営指導委員会】

(1)日時 平成26年11月12日(水) 13:30～15:40

(2)場所 筑波大学附属学校教育局

(3)出席者(敬称略)

運営指導委員 福嶋司、染谷忠彦、福原正大、M. Iqbal Djawad、Maidiarsd、Agus Justianto、Herianti Porsi Simarmata
オブザーバー BENTON Caroline Fern、猿渡康文、石隈利紀
教育局 甲斐雄一郎、新津勝二、今井二郎

坂戸高等学校職員 加藤衛弘、小林美智子、建元喜寿、石井克佳、岡聖美、福島寛美

(4)会議記録

司会挨拶 甲斐先生

石隈教育長挨拶

加藤校長挨拶

運営指導委員挨拶 福島先生、染谷先生、福原先生、Mr. Iqbal Djawad 氏、Mr. maidiarsd 氏、Mr. Agus Justianto 氏、Ms. Herianti Porsi Simarmata 氏

本校教員自己紹介

小林副校長、建元、石井、岡、福島、高良
オブザーバー自己紹介

BENTON 副学長、猿渡系長、新津次長、今井先生

<議事>

1. 概要及び全体像と進捗状況(建元)

(1)坂戸高校のSGHにおける強みと課題

① 総合学科における20年の課題研究の実績

② インドネシアをはじめとする海外協定校の存在

③ 英語への苦手意識と国際的な課題に関する認識の不足

ポンチ絵を使って

インドネシアの皆さんと手を取り合って持続的な社会を作るためには何ができるか。

科目「グローバルライフ」を開発し、身近な

課題として意識させる。

科目「社会と情報」と「コミュニケーション英語」をリンクさせた授業の展開

海外校外学習 2年次から1年次実施にし、行き先を3カ国(オーストラリア・インドネシア・台湾)からカナダに変更し、計画する。

「相手を知る」ために「インドネシア語講座」を実施する。

「国際フィールドワーク」の実施。

2年間に渡る課題研究

国際ESDシンポジウムなど教員は後ろでサポートし、生徒に自主的な活動を促す。

さまざまな国の人と会議を行う。

帰国生が入りやすい入試、本校の生徒が入りやすい筑波大学との接続入試を整備する。

(2)平成26年度の進捗状況

① SG入試の計画。27年度入試より実施する。

② 「グローバルライフ」の開発、「社会と情報」と「コミュニケーション英語」のリンク

③ 「国際フィールドワーク」の実施。

<質疑応答>

Mr. Iqbal Djawad 氏：様々な活動の素晴らしい報告をありがとうございます。今後もインドネシア大使館はサポートします。

福島先生：. 校外学習の期間はどのくらいか？

建元：1週間～3週間

福島先生：どの地域に行くのか。

建元：. バンクーバー周辺で計画している。

染谷先生：入試はこれからだが、内容はすべて英語でやるのか。

建元：全員ではないが一部の受験生に英語で行う。

染谷先生：対象は埼玉県か。

建元 埼玉県だけでなく東京都なども視野に入れる。在来の日本人学校、帰国子女なども対象にする。

染谷：普通高校と総合学科高校のイメージがいろいろあると思うので、よく説明をしてほしい。

英語検定の取得者への優遇はあるのか。

建元：ある。

福原先生：すばらしい課題研究だが、アウトプットにどうつながるのか。

建元：英語に関しては目標値が高いので、英語科に検討してもらっている。

総合学科の本校は専門教科の授業があるので、その授業に英語を入れることでモチベーションを高く学べるのではないかと。

2. 「国際フィールドワーク」の実施報告(建元)

(1)概要 SGHプログラムのひとつ「インドネシア百年の森プロジェクト」として実施

インドネシアの高校生との協同事業 プ

チ青年海外協力隊の経験をイメージする。

(2)時期と参加人数 8月に3週間 本校生徒8名

(3)内容 3班(環境・教育・産業)に分かれ活動する。

- ・小学校の巡回とESD出前授業内容の検討
- ・国立公園のゴミ問題解決と種の保全活動の実践

- ・森の伐採によらないビジネスの提案

(4)まとめ

- ・安全と健康が第一。
- ・3校の協働作業には一応の目安がついた
- ・20年後の世界が楽しみ
- ・他人任せでないプログラムの立案
- ・生徒の今後の変化に期待
- ・教員の意識改革が難題

<質疑応答>

福原先生：終わった後、定期的なコミュニケーションをとり続ける方策を考えているか。

建元：学校同士はつながっているが、生徒同士はフェイスブックで連絡もとりあえる。組織的なことは検討中である。

石隈先生：今の1年生が2年生になるとどんな効果が考えられるか。何が変わるか。

建元：今の2年生は事前のインプットが足りなかったが、渡航してインドネシアを理解してもらうことがその後の活動につながると考えている。事前のインプットをうまく行えば、さらに効果があるだろう。

福島先生：人数が8名だが、期間と共に増やすことも考えているのか。

建元：できれば人数を増やしたいし、時期も2週間で2回とか行けるといいが、引率の人数も増やさなければならないので、現実的に難しい。しかし、複数行くことで活動をスムーズに行うことができる。

染谷先生：インドネシアからも来ているのか。

建元：毎年短期の留学生が来ている。

3. 効果測定の結果(石井)

評価委員会を作り、効果の部分を担当している。次の項目について説明があった。

(1)学校概要

(2)文科省の数値目標と現状

<質疑応答>

福島先生：公的機関の表彰の回数を増やすというのはどういうことか。

石井：参加することに意義があるのではないか。

福島先生：学生が自主的に参加し、それを評価してもらうということか。

(3)事前調査について

① 生徒へのアンケート(H25年度のPre・Post、

H26年度のPre)

② PTA後援会へのアンケート

(4)今後の進め方

評価の適正や客観性を維持したい。

<質疑応答>

Mr. Agus Justianto 氏：このプログラムと他のプログラムとの関連性はあるか。

石井：本校では複数のプログラムが行われている。ユネスコ、大学との連携、個人でも海外への留学をしている。

Ms. Herianti Porsi Simarmata 氏：SGHのプログラムは素晴らしい。特に多国籍での交流が良い。期待している。

4. 運営指導委員からの助言

(1)福嶋先生

文科省が募集するプロジェクトは個性化を求めていく。それをやらないと採択されない。とにかく取るまでが大変。とってから大変。一つ一つの項目をしっかり押さえていかなければならない。毎年1回はチェックをし、さらに次からどうするかを考えていくことが重要。目標値と現実とのギャップを踏まえ、そこから展開を考えていってほしい。

(2)染谷先生

募集力・教育力・輩出力とあるが最も重要なのは子どもたちが応募してくること。何より子どもが応募してくることが大事。募集力には教育力と輩出力の説明が必要になってくるが、比較的近いところの市場に入っていくことは徹底しなければならない。秋田の国際教養大学も教育力と募集力で成功した。国公立では難しいが、私学と同じ戦い方をすることも重要である。

(3)福原先生

素晴らしい先生方の素晴らしいプログラム。これまでのつながりがあるから、アウトプットは容易に満たすことができるのではないか。しかし、SGHにおいて目標値と実際のギャップをどう埋めるのかイメージできなかった。アウトプットはできるが、アウトカムをどうするかということ次で次の事を考えるといいのでは。

① テクノロジーをどう使うか

英語の無料のプログラムなど無料でどうすることができるのかなどの視点が必要

② 外部に委託する発想がなく、全部内部で行っている。それは先生方に重荷になる。外部に委託することも考えて、私学がうまくやっていることを見習って見たらどうか。

(4)Mr. Iqbal Djawad 氏

非常に素晴らしいプロジェクト。

インドネシアから留学生が来ているようだが、

西から東までインドネシアは広いので、できるだけこの3校だけではなく、人数を増やしていけないか。インドネシアの団体は多くなっているのので、交流も多くできるようになる。東京にはインドネシア学校もあるので声をかけてみたらどうか。

(5) Mr. Agus Justianto 氏

これからは生徒の交流だけでなく、教師の交流も必要である。専門学校とも交流してみたらどうか。インドネシアの専門学校も発展途上でコンピュータ等も盛んなので、お互いに勉強になる。

(6) Ms. Herianti Porsi Simarmata 氏

効果測定の「外国人とあまり話したくない」などの数値を見るとコミュニケーションに問題があるのではないかと。留学生がホームステイをしているわけだから、ホームステイ中にお互いの文化を教え合うということがコミュニケーションを高めていく上で重要である。

(7) 猿渡先生

このプログラムを行うことによって坂戸として今まで積み重ねてきたものに、さらに加速して積み重なっていくことがあると思う。それに加えてSGHになったことで積み重なることが、どういう形で結実するのかの青写真が見えてこない。それをこれから見せて行って欲しい。

生徒が中心のプログラムであるのだから、制度のための評価だけではなく、生徒がどれくらい伸びたか、どれだけ自分の目的、成長のための目的を達成したかが重要になってくる。それは定量的に捉えられないかもしれないが、定性的にとっていくとよい。このプログラムは生徒が伸びるということに関して良いプログラムであるのだから、それを外に向けて公表していくことが重要なのではないかと。高校は通過点なので、坂戸の生徒をとらないと損ですと大学にアピールできる生徒を育てて行って欲しい。

(8) BENTON 副学長

とても良いプログラムでASEANの生徒達にもいい機会を与える。坂戸高校は総合学科が20年経った今でも適正をどんどん伸ばしていくプランを立てている。日本の格言にもあるように「継続は力なり」である。しかし、グローバルアドミッションポリシーはとても良いが、出口がどこに向かっているかわからない。求める「人材像」が不明確である。現在足りないところはそういうところで、生徒が持っている能力をいかに伸ばすか、どんなアクティビティを行えば、生徒の能力が開発できるか、考えて実施していく

べきである。

(9) Mr. Maidiarsd 氏

宿泊施設を利用して直接のコミュニケーションをとっていったら良いのではないかと。

5. 石隈教育長よりまとめ

このプログラムには特徴が2つあって、インドネシアの方から政府のバックアップと、高校生の交流、教師の交流、それから生徒の交流ではホームステイの活用など具体的なsuggestion(提案)があって、坂戸しかできないプログラムである。もう一つは生徒を募集していい教育をして、いい卒業をさせるという、教育力はかなり期待されている。卒業後の力、目標値、この辺が十分出来ていないので、どう具体化するかが課題。どういう人物を作りあげていくのか、このcompetency(能力)が卒業後アウトカムとしてできて、どういうところで羽ばたいていくよというイメージを整理するちよūdよい機会である。

6. 加藤校長より

本日は誠にありがとうございました。大変貴重なご意見をいただき、またインドネシアの皆さんからは非常に具体的な提案をしていただき、感謝いたします。日本は高度成長を経て物質的に豊かになった。その中で、大学生はAとBとCというものがあつた時それぞれの関係がわからない。社会はいろいろなものが関係してできあがっているにもかかわらず、それぞれを別々にしか理解できない。なので、これを総合的にまとめて理解するにはどうしたらいいか。これはおそらく高校生ぐらいのうちに、そういう発想を持たなければいけない。いろいろなものを総合化して理解していく。それは日本国内だけでなく、外国、海外のことも含めて総合化して理解していく、そういう訓練を、ある部分で、かなり重要な部分として私たちは今後していかなければならない。いろいろな問題を統合して理解できるような生徒をつくりたい、それが一つの青写真かなと思います。今後ご助言、ご提言、ご意見を賜ればありがたいと思います。本日はお忙しいところ、本当にありがとうございました。

表 7-1

Table 国際フィールドワーク前後における国際的資質尺度の経途統計量

	n	事前		事後	
		平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)
異文化・自国文化理解					
外国人への親和性	7	3.68 (0.75)	3.93 (0.12)		
自国理解	7	4.64 (0.63)	4.43 (0.53)		
多文化尊重	7	3.54 (0.41)	3.54 (0.25)		
外国文化への興味・関心	7	3.05 (0.36)	3.05 (0.59)		
外国語能力					
英語力	7	3.21 (1.07)	3.21 (1.19)		
他者理解	7	4.05 (0.40)	4.38 (0.40)		
アサーション	7	3.86 (0.24)	3.57 (0.67)		
興味・関心	7	1.57 (0.63)	1.67 (0.38)		
他者との協同的問題解決能力	7	4.13 (0.26)	4.29 (0.28)		
海外・国際交流への積極性	7	4.51 (0.36)	4.49 (0.23)		

*ワイルコクソンの符号付き順位検定の結果、全下位尺度において得点に有意差は認められず。

表 7-2

Table 国際フィールドワーク前後における国際的資質尺度各項目の記述統計量					
		事前		事後	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1. 外国人とはあまり話をしたくない	※	1.00	(0.00)	1.14	(0.38)
2. いろいろな国の人たちと知り合いになるのは楽しい		4.29	(1.50)	4.86	(0.38)
3. 多くの外国人と友達になりたいと思う		4.43	(1.51)	4.86	(0.38)
4. 出身国によって待遇に差があってもやむをえないと思う	※	2.14	(1.68)	1.86	(1.07)
5. 貧しい国の人ならば、意見が軽視されることがあってもやむをえない	※	1.71	(0.95)	1.00	(0.00)
6. ある民族がほかの民族より劣っていると考えてはいけなと思う		4.86	(0.38)	5.00	(0.00)
7. 外国で起きたいくつかの歴史的事件について詳しく説明できる		2.86	(0.69)	3.00	(0.82)
8. 世界の主な宗教の特色を説明できない	※	2.43	(0.98)	2.43	(0.98)
9. 外国で信仰されている宗教をいくつか挙げるができる		4.43	(0.53)	4.57	(0.53)
10. 日本の伝統的習慣を説明できる		3.86	(0.90)	3.71	(0.76)
11. 日本はすばらしい国だと思う		4.71	(0.49)	4.43	(0.53)
12. 日本人であることを誇りに思う		4.57	(0.79)	4.43	(0.79)
13. 海外に行ったら、地元の人々の習慣に触れたいと思う		5.00	(0.00)	4.86	(0.38)
14. 外国の伝統文化を紹介するような番組は見ない	※	1.71	(0.49)	1.86	(1.07)
15. 世界にどのような宗教があるか知りたい		4.00	(1.00)	4.14	(1.21)
16. 日本の独自の文化や歴史をもっと知りたい		4.29	(0.76)	4.86	(0.38)
17. 日本の独特な習慣を大事にした		4.43	(0.53)	4.57	(0.53)
18. 外国の文化を理解したいとは思わない	※	1.00	(0.00)	1.00	(0.00)
19. 異なる文化に触れることは、興味深い体験だと思う		4.57	(0.79)	4.86	(0.38)
20. 各国に見られる独自の習慣を尊重したい		4.43	(0.79)	5.00	(0.00)
21. 英語などの外国語で書かれた新聞や雑誌が読める		3.14	(0.90)	3.00	(1.29)
22. 自分の言いたいことを英語などの外国語で表現できる		3.29	(1.38)	3.43	(1.13)
23. 外国人から英語で話しかけられたとき、答えることができない	※	2.86	(1.07)	3.57	(0.98)
24. 外国語で書かれた新聞や雑誌に関心がない	※	1.71	(1.11)	2.00	(1.00)
25. 今後、外国語検定（英検、仏検、TOEFL、TOEICなど）を受験しようとは思わない	※	1.71	(0.76)	1.86	(1.46)
26. 今後、さまざまな国の言語を学ぶ気はない	※	1.29	(0.49)	1.14	(0.38)
27. 自分の意見をきちんと主張できる		3.57	(0.53)	3.43	(0.79)
28. 他人の意見を開ける		4.14	(0.38)	4.00	(0.00)
29. 自分の考えと異なる人に対して、自分の意見を言える		4.14	(0.38)	3.71	(0.76)
30. 他人の意見と自分の意見との相違がわかる		4.00	(0.58)	4.43	(0.53)
31. 相手の気持ちを理解しようとする		4.14	(0.38)	4.57	(0.53)
32. 言葉以外の手段でも相手の気持ちがわかる		3.86	(1.21)	4.57	(0.79)
33. 地球温暖化を防止するために、みんなで努力をしていきたい		4.29	(0.49)	4.71	(0.49)
34. 世界平和の維持に関心がない	※	1.00	(0.00)	1.29	(0.76)
35. 廃棄物による土壌・水・大気の汚染状況について知りたい		3.71	(1.11)	4.43	(0.53)
36. 自分の町をきれいにするように努力するのは大切だ		4.57	(0.53)	4.86	(0.38)
37. 世界の自然を守るために活動している機関を支援したい		4.57	(0.53)	4.71	(0.49)
38. 開発途上国の子どもたちが教育の機会に恵まれるよう支援していきたい		5.00	(0.00)	4.86	(0.38)
39. 困ったときに話し合っ、アイデアを出そうと思う		4.71	(0.49)	4.86	(0.38)
40. 自分と意見や文化の背景が異なる人と協力できる		4.86	(0.38)	4.57	(0.79)
41. 困難に直面しても、人と協力して問題解決に取り組む		4.43	(0.53)	4.57	(0.53)
42. 共通の問題を解決するためには、自分の意見が通らなくても納得できる		4.14	(0.69)	4.00	(0.58)
43. 海外へまた行きたい		4.71	(0.76)	5.00	(0.00)
44. 将来、結婚相手として日本人以外の国の人を選ぶことがある		4.00	(1.15)	3.29	(0.95)
45. 将来、同僚として外国人と仕事をしたい		5.00	(0.00)	4.71	(0.49)
46. 外国人は、自分の国に誇りを持っている		4.57	(0.53)	4.14	(0.90)
47. 英語以外の外国語を学びたい		4.71	(0.49)	5.00	(0.00)
48. 同年齢の外国人が話せる程度に自分も英語を話せるようになりたい		5.00	(0.00)	5.00	(0.00)
49. 海外経験を経て、日本にいる外国人に話しかけやすくなった		3.57	(0.98)	4.29	(0.76)

※は逆転項目

☆ウィルコクソンの符号付き順位検定の結果、49項目において得点に有意差は認められず。